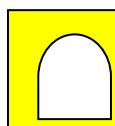


日吉台地下壕保存の会会報



第137号
日吉台地下壕保存の会

思い出すことと歴史を語ること

会長 阿久沢 武史

昭和18年(1943)10月4日、上原良司は慶應義塾大学経済学部本科の入学式を迎える。戦局の悪化の中で予科の修業年限が半年短縮されたためです。彼の手帳には、10月21日「学徒出陣壮行会。制服制帽、八・〇〇、外苑球技場、キャバン。」、22日「ニュー・ヘブライズ諸島、龍男兄さん戦死。」、11月23日「午前九時 出陣塾生壮行会(大ホール)。」、12月1日「入営の予定。」と記されています(『新版あゝ祖国よ恋人よ』より)。

それから75年が経ち、昨年の12月1日と2日の両日、慶應義塾大学三田キャンパスにおいて「慶應義塾と戦争」と題する研究報告会が行われました。「日吉台地下壕と教育」のテーマで私も発表の機会をいただきました。私たちの会では定例の見学会に加えて、学校単位の見学をガイドする機会が年々増えています。小学生から大学生まで、10代と20代の若い人たちが対象です。地下壕を歩き、そこで感じることは一様でないと思いますが、案内する私たちが若々しい感受性に対して、何かの種を蒔いているのは確かなことだと思います。

私がお話ししたのは、研究というより実践の報告です。慶應義塾高校での見学会で、私は上原良司の「所感」を読むことにしています。22歳の上原が沖縄特攻の出撃の前夜に書き残した文章です。地下作戦室の闇の中で、生徒が朗読する上原の言葉が響きます。彼らは上原と同じ校舎に学び、同じキャンパスで青春の時を過ごしています。自分と75年前の先輩との繋がり、過去と現在との連續性を意識した時、生徒たちの心の中に上原のどのような姿が浮かび上がってくるのでしょうか。

小林秀雄は若い世代に向けた講演の中で、歴史について次のように語っています。

歴史とは上手に「思い出す」ことなのです。歴史を知るというのは、古えの手ぶり口ぶりが、見えたり聞えたりするような、想像上の経験をいうのです。(中略) 諸君の現在の心の中に生きなければ歴史ではないからです。それは史料の中にあるのではない。諸君の心の中にあるのだから、歴史をよく知るという事は、諸君が自分自身をよく知るということと全く同じことなのです。(『小林秀雄 学生との対話』新潮社より)

過去の出来事を自分の心の中でありありとした形で見ること、それは例えば地下

【目次】

- 巻頭言【1-2p】 思い出すことと歴史を語ること 会長 阿久沢武史
- 報告【2-5p】 第26回川崎・横浜平和のための戦争展 2018
 - ☆報告とお礼 副会長 亀岡敦子
 - ☆「若者の発表」を聞いて 運営委員 遠藤美幸
 - ☆講演「アジア・太平洋戦争の現実」を聞いて 運営委員 小山信雄
- 報告【6-7p】 慶應義塾大学経済学部・白井厚研究会OBG会主催「講演会」に参加しました 運営委員 小山信雄
- 報告【8-9p】 「慶應義塾と戦争」学徒出陣75年シポジウム・研究報告
- 報告【9p】 第13期ガイド養成講座が始まる 運営委員 佐藤宗達
- 連載【10-14p】
 - ☆地下壕設備アレコレ(24) 機関科電機長のお話 運営委員 山田 謙
 - ☆第一校舎ノート(15) 正面玄関の鷲(その1) 会長 阿久沢武史
 - ☆海外の戦跡めぐり(10) ソウル・韓国 運営委員 佐藤宗達
- お知らせ【15p】
 - ☆4/6(土) 戦争体験者のお話(岩井忠正さん、近藤恭造さん)
 - ☆4/21(日) バスツアーのお知らせ(三多摩戦争遺跡と横田基地)
- 活動の記録(2018.10月~2019.1月)【16p】

壕の中を実際に歩きながら五感を通して知る歴史と重なります。しかしながら、ガイドする私たちが一方で注意しなければならないのは、私たちの語る言葉が決して虚構であってはならないということです。上原の死や青春を美化する物語を語ることに、私たちは慎重でなければなりません。過去を上手に「思い出す」ためにも、歴史的事実に対して常に注意深くあります。そうしたことをあらためて考える三田での二日間でした。

新しい年を迎えました。本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

報告

「第26回川崎・横浜平和のための戦争展2018」

☆報告とお礼 副会長 亀岡敦子

26回目となる「川崎・横浜平和のための戦争展」は、秋晴れの11月3日と4日、川崎市中原区平和公園の一角にある川崎市平和館で開かれました。テーマは「地域の戦争遺跡からアジア太平洋戦争を考える」とし、企画運営は、登戸研究所保存の会、日吉台地下壕保存の会、川崎中原の空襲・戦災を記録する会、みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会の4団体で行いました。それぞれ、川崎市と横浜市で戦跡保存や調査研究、戦争体験の継承などの活動をしている団体です。

内容は、展示スペースでの団体ごとの写真や資料などの展示と、屋内広場とよばれるホテルでの講演会と若者の研究報告です。展示は、初めての人にも見やすく、しかも内容が伝わるように工夫しました。来場者の多くは、時間をかけて丁寧に見てくれるので、その戦跡の存在を知ってもらう、という目的のひとつは達成しているのですが、口頭での説明が必要な個所もあり、毎回宿題は残ります。

「若者の発表」は、若者の活動や研究成果を発表する場として、26年間途切れずに続けてきたプログラムです。今回は『『慶應義塾と戦争』アーカイブ・プロジェクトの活動から』横山寛さんと、「戦争を『考える』ということ—明治大学平和教育登戸研究所での業務を通して」渡井誠一郎さんという、実際に戦争継承の事業に携わっている若手研究者の報告で、真摯な取り組みに心強く思えました。

最後は、このような本には珍しくベストセラーとなった『日本軍兵士』(中公新書)の著者、吉田裕一橋大学特任教授の講演です。演題は「アジア・太平洋戦争の現実一兵士の視点から」で、豊富な資料と知識に裏付けされた講演に、会場を埋めた聴衆は聴き入りました。

26回目の「川崎・横浜平和のための戦争展」も盛会のうちに終了しました。これも、贊助金をお寄せ下さった方々や、会場までお運びくださった方々のおかげです。昨今の世界情勢を見ると不安と無力感におそれますが、自分たちの出来る活動を継続するのが「気が付いた者」の役目だと改めて思い至りました。



展示スペースでの展示

(日吉台地下壕保存の会ほか)



収束焼夷弾（親爆弾）の実物大模型

(川崎中原の空襲・戦災を記録する会)

☆「若者の発表」を聞いて 運営委員 遠藤美幸

今回の「若者の発表」は、慶應義塾大学と明治大学に属する2名の若い研究者が以下のテーマで報告しました。

- ① 横山 寛(慶應義塾福沢センター調査員)
『慶應義塾と戦争』アーカイブ・プロジェクトの活動から
- ② 渡井誠一郎(明治大学大学院博士後期課程)
「戦争を『考える』ということ—明治大学平和教育登戸研究所資料館での業務を通じて」

【横山報告の要旨】

2013年より慶應義塾福沢センター内で「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトが始まりました。このプロジェクトは、戦中から戦後の学内における戦没者調査を目的としています。その対象者は慶應義塾諸学校関係者とし、この中に幼稚舎の集団疎開や中学生・大学予科生の勤労動員なども含まれます。

横山さんはこのプロジェクトの調査員として、現在は主に慶應経済学部の戦没学生・上原良司(1945年5月11日沖縄近海で特攻死)の調査・研究に取り組まれています。良司は兄二人妹二人の五人兄弟の三男。慶應医学部卒の二人の兄も軍医として

戦死しています。長野県安曇野市にある上原家には、三人兄弟の学生生活や日常を記録した膨大な資料が残されています。横山さんはこれらの上原家資料から、従来の戦没学生の象徴的存在である上原良司とは異なる等身大の良司の姿を提示しました。良司ばかりが注目されがちですが、二人の兄・上原良春と上原龍男の資料も豊富に残されており、弟の良司の進学の助言をする長兄良春の手紙などから上原家の三男の良司の姿が見えてきます。今後の上原家資料の調査・研究の進展により、上原三兄弟の実像がさらに明らかになることを期待します。



上原家の五人兄弟
(左より、長男：良春、次男：龍男、三男：良司、長女：清子、次女：登志江)

【渡井報告の要旨】

渡井さんは、大学院に属する歴史(戦争)研究者である傍ら、明治大学平和教育登戸研究所資料館(以下、登戸研究所資料館)において、来訪者への展示などの解説業務も行っています。渡井さんは、このような研究者と歴史博物館の解説員の二つの立場から、歴史(戦争)にどう向き合うのか、またどう伝えるのかを問い合わせ続けてきました。

今回の報告は、現在の渡井さん自らの立場や経験を客観視しながら、歴史や戦争を「考える」とはどういうことか、あるいはどのように「考える」のかを模索する試みです。これは渡井さんの個人的問題に留まらない、戦争をどのように考え、伝えていけばよいのかという戦争の非体験者である次世代に向けての問い合わせでもあります。

渡井さんは、歴史研究者として文献に当たるときも、歴史や戦争を「考える」第一歩は、当事者の身になり考える「想像」と「共感」が先決で、「分析」や「解釈」はその後ですべきだと主唱します。一方で、登戸研究所資料館では直接来訪者に接する際は、来訪者の「想像」や「共感」の妨げにならないように、研究者としての自分の価値観を強く表面化しないように留意されているとのことです。「物」資料(戦跡や史跡も含む)を「ありのままに」伝え、来訪者に「考える」きっかけを与えるためであると推察できます。

☆講演「アジア・太平洋戦争の現実—兵士の視点から—」を聞いて

運営委員 小山信雄

今回の戦争展2日目(11/4)の講演では、吉田裕さん(一橋大学特任教授)より約2時間にわたってお話し頂いた。兵士の視点から見た「アジア・太平洋戦争の現実」ということで、ご自身の多くの著書始め、他の戦争研究者の文献の抜粋などにより、数字に基づいた具体的、且つ多くの生々しい事例を取り上げて、大変興味深い講演をして頂きました。講演の概要は以下の通り。

1. 戦後の戦史研究

① 歴史学研究者には戦史研究を忌避する傾向

- ・「歴史学の戦争記述は戦記とは一線を画し、戦闘の様子は殆ど触れられず(有っても数量的な記述に留まる)、戦争の全体的・総体的な把握が目指されている」という1950年代の記述は、基本的には現在も当てはまる。
- ・地域史、民衆史から軍隊をとらえ直すという視点に基づいた研究が登場するのは、1990年代に入ってから。

② 旧軍人・自衛隊関係者による戦史研究(戦訓研究)が主流に

- ・復員関係機関→陸上自衛隊幹部学校戦史室→防衛庁防衛研修所戦史室という流れに。
- ・旧海軍関係者は、独自に史料調査会を創設(旧陸軍主導の防衛研修所戦史室には警戒的)で、同会の史料は、昭和館、大和ミュージアムへ。
- ・「戦史叢書」の問題点:旧陸海軍エリート将校(特に陸軍)による戦史という性格が色濃く、作戦が中心で、補給・情報・衛生等の軽視、兵士や現場(戦場)の視点がない。
- ・上官の指揮した作戦を、部下である参謀が評価するということに対し、批判の矛先はどうしても鈍ってしまう(身内を庇う傾向)。
- ・陸海軍の対立が戦史室にまで及び、統一したものが出来なかつた。特に開戦経緯については(海軍は、陸軍が暴走したからだ、陸軍は、・・・)。

③ 戦史研究(戦場を兵士の視点と歴史学の手法で分析)という問題意識が次第に明確に

- ・自著「天皇の軍隊と南京事件」(1986年):南京事件の実態とその歴史的背景の分析に取り組んだものだが、戦争犯罪の告発という性格が前面に出ていて、その分、侵略戦争の尖兵として戦った兵士達が置かれていた歴史的環境や彼らの複雑な心理状況に対する目配りは、やはり不充分なものになつてゐる・・・
- ・自著「アジア・太平洋戦争の戦場と兵士」(2006年):兵士の目線で戦場の再現を意図。旧幕僚将校とも、靖国神社=遊就館的なものとも異なる戦争史研究である。

2. 戦場からみたアジア・太平洋戦争 『日本軍兵士』(2017年)を中心に

① 軍事的的前提

- ・戦時に設置される臨時軍事費特別会計(審議は秘密会で可決)。
⇒日中戦争の完全な行き詰まり、日中戦争の臨時軍事費の転用・流用による軍備の充実。
⇒もしも日支戦争がなかつたら、日米戦争は之を欲しても戦い得なかつた。
⇒日支戦争を戦いながら、逆に戦力が増えていった。
- ・アジア太平洋戦争開戦時には太平洋戦域では米国を上回る軍備を保持。
一例(航空母艦):日本10 VS 米国3隻(但し、大西洋海域含めれば米国計11隻)

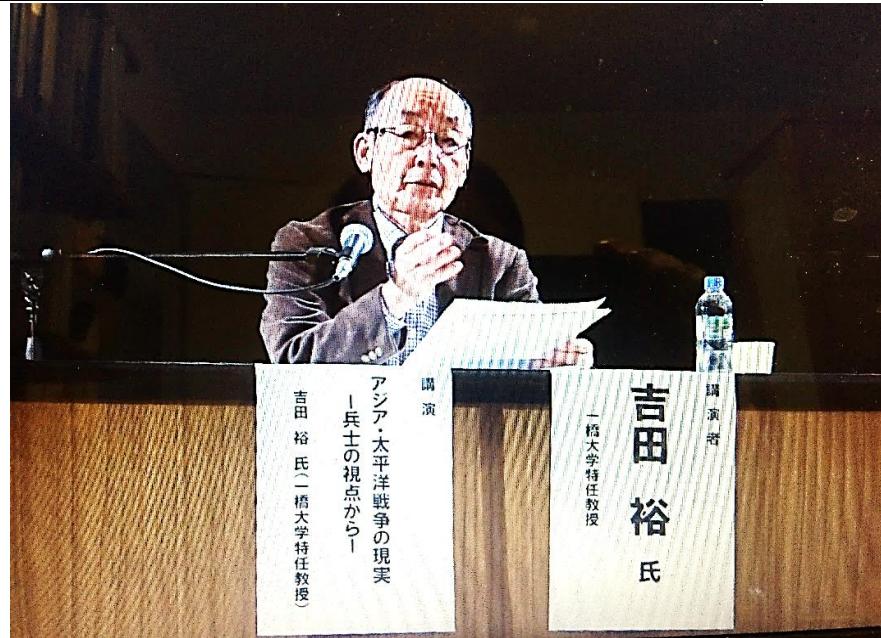
② 戦没者数について

- ・日中戦争以降の全戦没者数=軍人・軍属230万人、外地の一般邦人30万人、戦災等による国内の死没者50万人(総計310万人:實際は以上の可能性大)。
- ・各種データ不整備により推定となるも、310万人の約90%が1944年以降の死者。

- ・階級が高いほど戦死率低下と推定：メレヨン島（ミクロネシアの環礁）陸軍守備隊の生還率の例：将校 126 人 (67%)、兵士 445 人 (18%)。
- ・少年兵に依存した「帝国陸海軍」は特異な存在。ミッドウェー海戦(1942. 6)の日本 戦死者=3,057 人 (内、15 歳 4 人、16 歳 10 人、17 歳 59 人)。

③ アジア・太平洋戦争期に固有な特異な死のありよう

- ・戦病死：230 万の軍人・軍属の戦死者の内、多くが戦病死者と考えられる。インペール作戦：13,577 人の 6 割に当たる人々が作戦中止 (1944. 7) 以降に亡くなった。そのほとんどは「病死（相当数の餓死）」だった。
- ・海没死（艦船の沈没に伴う死）：は約 36 万人、他に船員の死者 6 万人。
- ・特攻死：航空特攻を主力とした特攻隊の全戦死者数は、陸海軍合計で、4,160 名。主力は学徒兵と少年兵、少年兵出身の下士官。戦死者の中で 20 歳以下の若者が占める割合は、陸軍 23.5%、海軍 43%。
- ・自殺と「処置」（動けない傷病兵の殺害、自殺の強要）。
- ・体力の劣る弱兵、老兵、知的障がい者の増大。



講演される吉田 裕氏

3. おわりに

- ・こうした悲惨な体験⇒旧軍人（兵士同士、兵士と上官）の一体感を破壊、軍隊や戦争に対する強い忌避感⇒戦場のリアルな現実に対する想像力を衰弱化⇒体験の伝達、継承のためには現在と過去をつなぐ回路の設定が必要。

感想：今迄、戦争のことを学ぶにつけ、「何故そんなことになってしまったのか？」といった憤りや疑問も多くあった中、今回のお話を聴いて腑に落ちた点が多くありました。兵士の生命軽視の特攻は言うまでもなく、改めて重視すべきと感じた事柄は、「補給・情報・衛生等軽視の作戦計画」「陸軍と海軍の不統一」「上官の過ちを決して批判出来ない組織的体質」等です。何故、帝国陸海軍は補給等を軽視して、戦力任せで戦線を際限なく拡大し、結果として戦闘によるものではなく、多くの「餓死・病死」を出すことになってしまったのか？

何故、例えば、台湾沖航空戦の「大成果」が誤報であったことを検証しておきながら、海軍は陸軍に真実を伝えることもなく、レイテ島の悲劇を誘発させてしまったのか？ミッドウェー等の失敗の教訓が何故活かされなかったのか？ロジスティクスを重視し、武器・食料を満載した補給部隊を背後に、海軍も指揮下に入れて進軍してきた陸軍マッカーサーの米軍と較べ、何という次元の違いであったろうか！！

「臨時軍事費特別会計」もとても気になった。どんな戦争好きの軍人が暴れようが、戦争で一儲けを企んでいる軍需産業の資本家が熱望しようが、戦争が国家どうしの争いである以上、国家予算が承認されない限り、戦争の継続は不可能。予算の原資は国民の税金（血税）です。時代は変われど、「兵士（国民）の視点」の重要さを認識しなくてはなりません。

報告

白井厚研究会OBG会主催の講演会に参加しました

運営委員 小山信雄

白井厚研究会OBG会は、日吉台地下壕保存の会を顧問として長年支え続けて頂いている白井厚慶應義塾大学名誉教授の会であり、今年で設立46年目となります。2018年度の総会（日時：2018年11月10日）は慶應義塾大学三田キャンパス北館大会議室にて開催され、日吉台地下壕保存の会に講演を依頼されることとなりました。「日吉台地下壕と保存の会の活動—慶應義塾日吉キャンパスにのこる戦争遺跡—」の演題で、音響設備・ワイドスクリーンの完備した大会議室（参加者は約70名）にて、保存の会の発足（以前も含む）からの経緯、最近の活動内容等について、2時間の講演の後、30分の質疑応答の時間の中で、沢山のご質問、ご意見を頂きました。以下、講演内容の概要をご報告致します。

1. 保存の会について（発足からの経緯）

- 保存の会の発足は、1989.4の事であるが、この20年前に「私達の会の源流：慶應義塾高校地底研究会」による地下壕探索、詳細な調査、地下壕築造時を知る将校クラスからの直接聞き取り等があったことを紹介。



冊子『わが足の下日吉地下施設の秘密』
※保存の会発作の20年前に…私たちの会の源流が
高校生（地底研究会）の知的関心と好奇心にあった！
※2017.8/9 当時のメンバーに会うことが出来た。

1969. 6~9月 慶應義塾高校1年生（16人）による調査研究
11月 日吉祭で展示発表
1972.3月 冊子発刊
* 詳細な地下壕調査
* 地下壕築造時のことを直接知る将校クラスからの直接聞き取りも行った。

1985~学内教職員有志による壕内の調査・聞き取り始まり、
この地下壕は歴史的にも土木学的にも大変重要な施設であることが分かり、慶應義塾職員と地域住民が一緒になって、貴重な地下壕を保存するため、4年後の「会」発足となる。

慶應義塾の教職員有志、空襲下の日吉で生きた人々、旧海軍関係者、地域で子供たちの教育にたずさわる教師たち、きわめて穏和だが、平和への熱い想いを胸に秘めた周辺の市民が、一つの目的のために、この会を結成したこと自体、数年前に地下壕調査を思い立ち、細々と活動を続けてきた私たちにとっては、当初は夢にも考えなかつた画期的な出来事です。そして会の結成が画期的であればあるほど、会に加わる私たちの責任は重いのだと言わなければなりません。

『会報』第1号（1989年5月10日発行）永戸多喜男会長

◇わが足の下 日吉地下施設の秘密

地底研究会 昭和44年 日吉祭グループ参加

はじめに 私たちは、44年の4月に入學して、まだ学校の様子も良くわからないときに、裏の谷に地下壕（正確には地下施設という）の入り口があることを発見した。興味本位に出入りしているうちにそこに強い愛着を感じようになつたのである。そこでわれわれは、内部の様子をより詳しく知ろうと自分たちで地図を作りながら中を歩きまわった。さらにこれだけでは飽き足らずに古い資料を外部に求めたが、ほとんどものが終戦時に焼却されたということで手に入らなかつた。そのため、ここに集めた資料は、内部構造を除いて、すべて当時の関係者の記憶をつなぎあわせたものである。

内容は、地下施設の内部構造と、時代的背景を中心にしてまとめた。
なお、地下施設内部に立ち入ることは学校当局によって禁止されているが、われわれは調査のために、いろいろな条件のもとに特に許可を受けた。

その条件とは

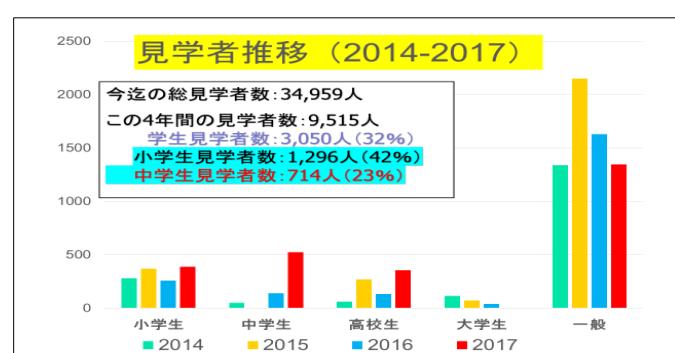
- 地下施設内部に立ち入る際には必ず慶應高校教諭の付添を必要とする。
- 地下施設内部に立ち入る前後には、必ず庶務課に届ける。

2. 最近の活動内容について

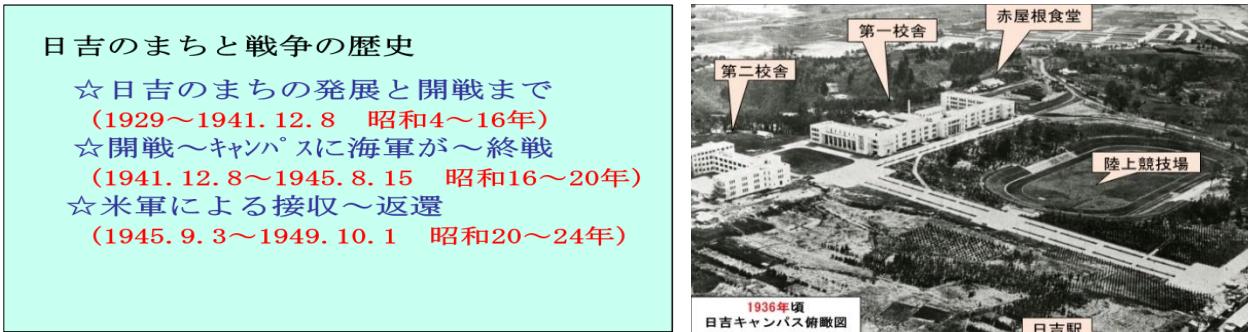
- 私達の活動の軸として、地下壕を「広く知って貰う」「その為に勉強・調査・研究を続ける」「記録に残す」の3点を挙げ、「見学会・講演会・各種戦争展への参加」「ガイド養成講座・学習会・外部講師による講演会・体験者からの聞き取り」「会報の発行・資料集の発行・冊子の刊行」などを挙げた。

◇最近の活動内容について

- 地下壕を含む日吉の戦争遺跡を知って、価値を理解してもらう活動
 - ・見学会の実施（年間約50回）
 - ・講演会（港北図書館パネル展示会、日吉地区センター主催講座）
 - ・平和のための戦争展inよこはま（展示）
 - ・戦争遺跡保存全国ネットワーク大会（分科会発表）
 - ・平和のための戦争展川崎・横浜（展示、講演会の開催）
 - ・地域のチカラ応援事業（公開提案会、中間報告会、最終報告会）
- 勉強・調査、研究活動
 - ・ガイド養成講座（1～5月、5回の講座、ガイド補助実習）
 - ・ガイド学習会
 - ・公開講座、外部講師による講演会
 - ・体験者等からの聞き取り
 - ・戦争遺跡バス旅行
- 記録を残す活動
 - ・会報の発行（年約4回）・資料集の発行・冊子の刊行

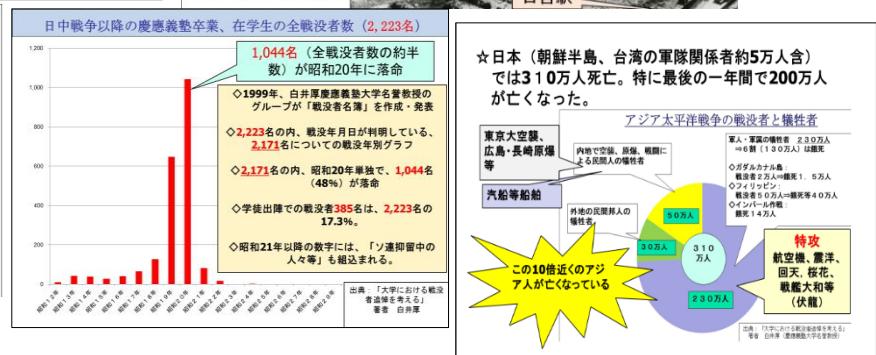
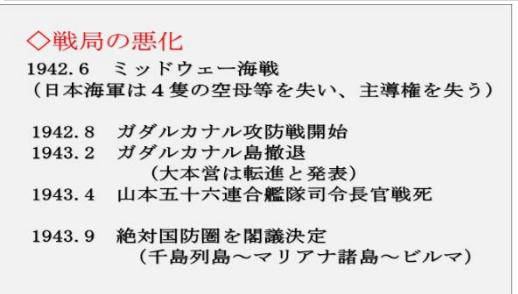


・日吉のまちの発展と戦争の歴史について3つの時代に区切って説明。

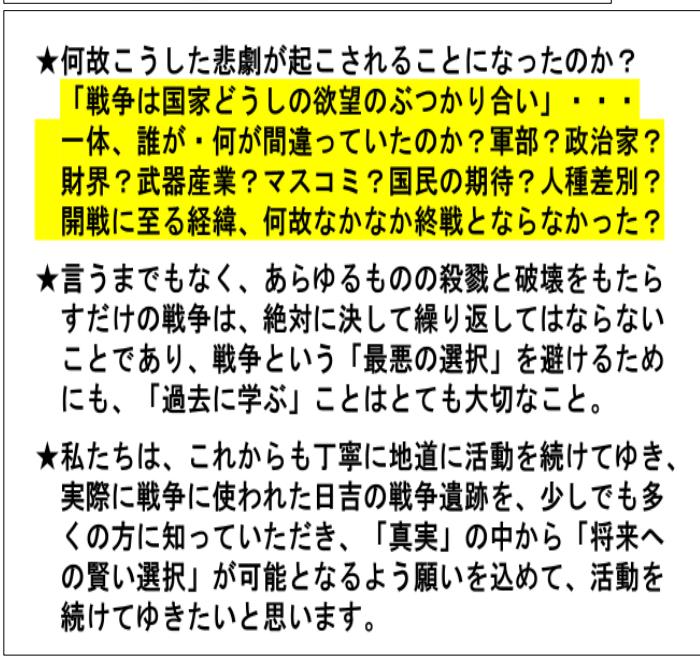


日吉のまちと戦争の歴史

- ☆日吉のまちの発展と開戦まで
(1929~1941. 12. 8 昭和4~16年)
- ☆開戦~キャンパスに海軍が~終戦
(1941. 12. 8~1945. 8. 15 昭和16~20年)
- ☆米軍による接收~返還
(1945. 9. 3~1949. 10. 1 昭和20~24年)



・一番重要な見学会ガイドの養成講座と最近の成果について報告。また会報で取上げて来た様々な内容（外部講師の講演、戦争体験者のお話、地下壕設備事情、第一校舎ノート、海外戦跡めぐり等）について紹介。



講演会会場
(慶應義塾大学三田キャンパス北館大会議室)

報告**「慶應義塾と戦争」学徒出陣75年シンポジウム/研究報告**

2018年12月1日、2日の両日にわたり、慶應義塾大学三田キャンパス南校舎5階「南校舎ホール」にて、「慶應義塾と戦争」と題する研究報告がおこなわれました。近代史の研究機関である慶應義塾福沢研究センターでは、2013年8月より「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトと題して、戦争期の慶應義塾に関する多角的な調査・研究活動が進められており、5年経過した現在の調査状況の報告、及び慶應義塾に関連して様々な視点から進められている最新の戦争期研究の発表が、この度開催されることになりました。日吉台地下壕保存の会からも、「上原良司の新資料に見る虚像と実像」(保存の会副会長 亀岡敦子)、「日吉台地下壕と教育」(保存の会会長 阿久沢武史)の2本の報告が行われました。

【12月1日(土) 第一部 シンポジウム】

* 戦時下の塾生・塾員の動向分析—在学証明・学籍簿・成績原簿・卒業学生要録のデータベース化を通じて— 平山 勉(湘南工科大学工学部教授)

* 慶應義塾関係者への戦時下に関する聞き取りの分析 石田幸生(亞細亞大学都市創造学部専任講師)

* 戦時下の塾生・塾員資料の収集とその意義 横山 寛(慶應義塾福沢研究センター調査員)

* 戦時下の塾生・塾員の展示と発信 都倉武之(慶應義塾福沢研究センター准教授)

* 慶應義塾幼稚舎疎開学園資料集の刊行 加藤三明(慶應義塾幼稚舎教諭)

【12月2日(日) 第二部 研究報告】

* 陸海軍史料に見る「学徒出陣」—在学徵集延期停止の背景と昭和十八年臨時徵兵検査— 田中温子(国立公文書館非常勤職員)

* 長野県安曇野市・上原家資料調査

- ① 上原良春・龍男・良司兄弟の資料と分析 横山 寛(慶應義塾福沢研究センター調査員)
- ② 上原良司の新資料に見る虚像と実像 亀岡敦子(日吉台地下壕保存の会副会長)

* 映画『陸軍中野学校』と中野学校1期生—特に慶應義塾出身者について—

手島有紀(慶應義塾大学法学部政治学科4年 メディア・コミュニケーション研究所都倉武之研究会)

* 慶應義塾幼稚舎疎開学園資料からみえる私立小学校疎開研究の課題に関する資料と報告 柄越祥子(慶應義塾福沢研究センター調査員)

* 日吉と鹿屋—鹿屋第五航空艦隊司令部地下壕の調査成果から—

安藤弘道(慶應義塾大学文学部教授)

* 谷口吉郎・イサム・ノグチの戦後建築と平和への眼差し

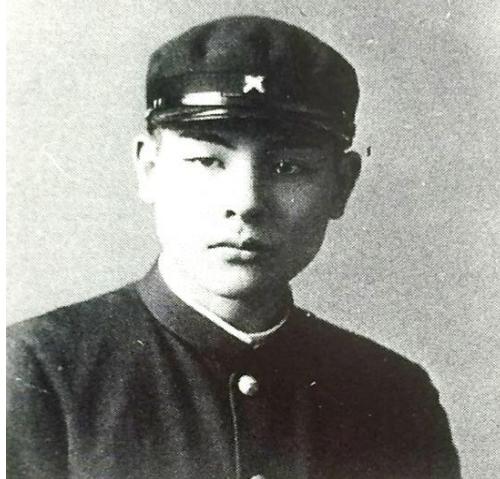
渡部葉子(慶應義塾大学アート・センター教授)

* 慶應義塾図書館が受けた震災・戦災による影響とその後の改修工事

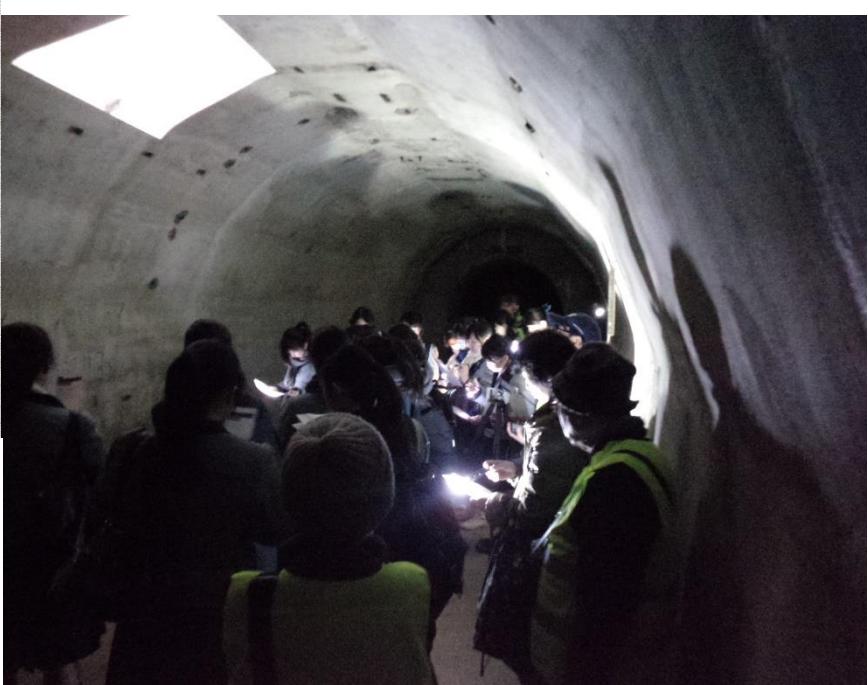
高村功一・館崎麻衣子(文化財保存計画協会)

* 日吉台地下壕と教育 <教材>としての日吉台地下壕

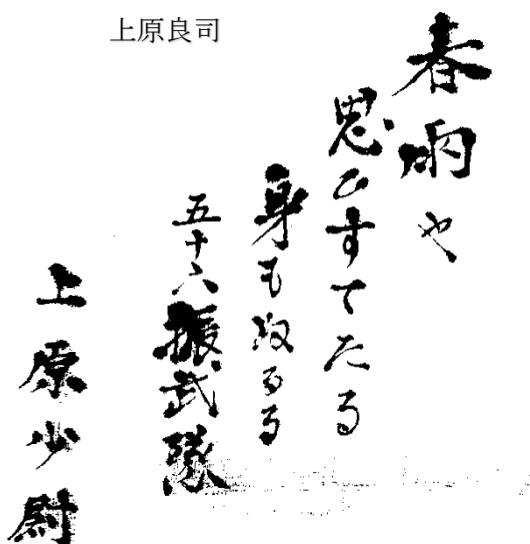
阿久沢武史(慶應義塾高等学校教諭) 日吉台地下壕保存の会会长)



上原良司



地下壕作戦室にて上原良司の「所感」を朗読



報告

第13回ガイド養成講座が始まる
運営委員 佐藤宗達

第13期ガイド養成講座が1月12日開講しました。養成講座案内の周知期間が短かったので受講者が少ないのでと危惧しておりましたが、新聞に折り込みのタウンニュースを見て参加された地元の方々が多数受講され、10名の受講者を迎えて第1回の講座を持ちました。亀岡副会長の挨拶に続き、小山運営委員のパワーポイントによる当会の紹介、活動の内容、慶應日吉キャンパスの歴史・説明、地下壕見学会の様子につき1時間を越えるガイダンスがありました。

休憩を挟みガイド養成講座修了者の体験談・感想、その後受講者も含め参加者全員の自己紹介をしました。

第2回は3月9日「フィールドワーク」で地下壕群を見て廻ります。第3回の4月6日「戦争体験を聞く」では2名の方の戦争体験をお聞きする予定です。第4回は5月11日「ガイド活動の実際・まとめ」を予定しております。

受講者の多くの方が講座を修了されてガイドとして参加していただくことを期待しております。



第13期ガイド養成講座初日 (2019.1.12)
於：慶應義塾日吉キャンパス来往舎中会議室にて

連載

地下壕設備アレコレ【24】

連合艦隊司令部・機関科電機長 菅谷源作氏のお話

運営委員 山田 譲

有隣堂書店が発行している新聞「有隣」平成3年(1991)8月10日号に、「旧海軍日吉台地下壕」という題で座談会が記事になっていました。出席者は、当会の元事務局長寺田貞治氏、元海軍機関科下士官の菅谷源作氏、横浜大空襲などの研究で知られる今井清一氏です。この菅谷源作氏が日吉で電機長だったことについては、生協ニュース1990年10月3日号で寺田氏が聞き取り記事を書いています。しかし私は、この「有隣」の記事を最近になって初めて見ました。この座談会で菅谷氏は、生協ニュースの聞き取り記事には書かれていないこともあります。今回は、この座談会での菅谷源作氏のお話と、生協ニュースの聞き取り記事を紹介します。

機関科水兵2名は「鳥当番」?

海軍の機関科というのは、軍艦ではエンジンや発電機、電気設備、船体修理、燃料などを担当する兵種(専門職種)です。民間船舶では機関士に相当します。日吉の連合艦隊司令部は陸上施設なのでエンジンはありませんが、地上、地下の設備を機能させるための専門部隊が必要です。菅谷氏が書いた機関科の集合写真(下記写真参照)の説明によると、この機関科には担当業務がいろいろありました。電機、ボイラー、補助機、木工、自動車、そして鳥当番です。菅谷氏は電機長で当時20才。階級は上等機関兵曹で下士官でした。昭和19年



昭和20年元旦 「日吉部隊」機関科27名集合写真

上段(水兵) :

ボイラー 電機 電機 ボイラー 電機 藤原水兵(戦死) 自動車 自動車 自動車 補助機

中段(下士官・士官) :

自動車 木工長 補助機長 自動車長 分隊長 班長 ボイラー長 ボイラー 電機長 菅谷氏

下段(水兵) :

水兵 水兵 電機水兵 水兵 水兵 鳥当番水兵 鳥当番水兵 電機水兵

9月19日に「先選隊」として日吉に来て、まず水、電気などを確保しました。連合艦隊司令部ということを隠して「日吉部隊」の身分証明書(右写真参照)を持っていました。「寄宿舎(の浴場棟)の釜(ボイラー)のすぐ隣にあった配電盤」のところで当直をしたそうです。「補助機」というのは補助電源のディーゼルエンジン・発電機の担当のようです。自動車は5台ありました。

しかし「鳥当番」というのは何でしょうか? 菅谷氏によると司令部では「鶏を百羽ぐらい飼って、全部足へ札をつけ、私の兵隊を二人専属につけて、兵隊に卵のできぐあいなどを帳面に記録させ」ていたのです。海軍に入隊して、高級将校の食べる卵のための鶏の世話係とは、水兵さんはどんな気持ちだったでしょうか。豊田副武長官は「今日はどのニワトリが卵を産んだ」とか言っていたそうです。また菅谷氏は「私は映写技師もやっていましたので、映画を毎日のように長官にご覧にいれました」とのこと。これが特攻命令を出した最高指揮官なのかなと思うと、やりきれない気がします。

機関科は初めは「今コートになっている所に二棟二階建てがあり、その二階で寝泊まりしていました。それが二十年四月三日夜から四日の大空襲で全部焼けてなくなりました。」「この時、藤原という部下が一人亡くなりました。」この建物は木造で、体育会本部だった所です。

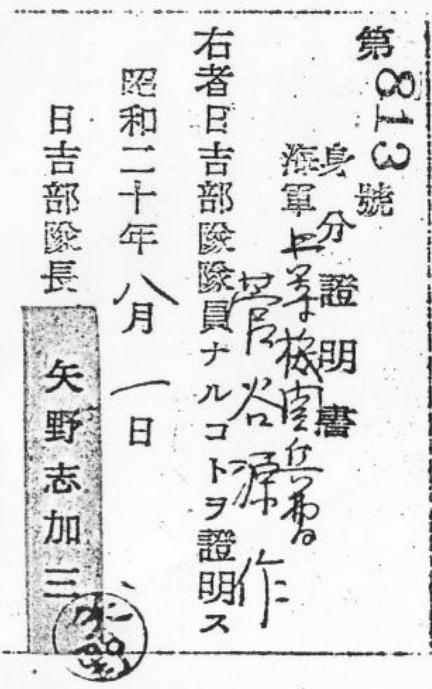
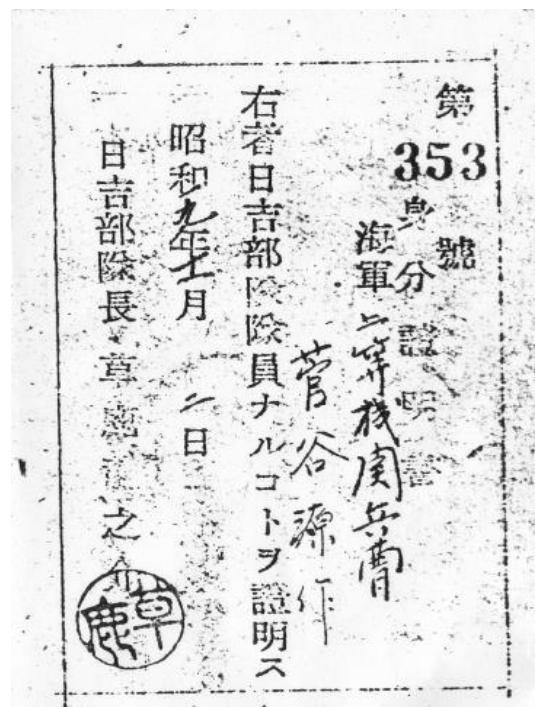
(P12写真参照)その後は、「地下壕の出入口の前」の「カマボコ兵舎に移った。」また菅谷氏は自分の仕事については「照明はよかったです。私は無線から電気、扇風機、電機関係の一切の仕事を持っていました」「電気をいかにして絶えず保つか。もし電気が止まつたら私の首がなくなります」と勤務のきびしさを語っています。

地下壕内に木製の仕切り

地下壕の造りについても、いろいろ話されています。126段の階段については「寄宿舎の庭から斜めに地下壕に入るところがあります。あれは空襲が盛んになって、上が焼けてから急に掘り出したんです。それまでは山の中に道をつけて、そこをパッとおりるようにして入っていたんです。あそこは突貫工事で、見てる間に掘っちゃった。」

地下壕内の内装については「壁面はコンクリートです。中央に天井に達する木製の仕切りがあつて、半分は仕切りに沿つて数段の棚がずーっと続いていました、との半分は通路になっていました。」(これは通路部分でなく食料倉庫、備品倉庫などの部屋部分のことのようだが、不明。言っている主旨は、壁はコンクリートむき出しだったということ。)「通風は絶えず、すごくよかったです」「湿気はすごかったです。場所によってはポタポタ落ちていました。」

「床はコンクリートの打ちっぱなしです。」ドアは「ついているところとついていないところがあるんです。」「無線の司令室(通信室のことらしい)、長官室とか作戦室(P12写真参照)は外部から見えないようになっていました。」司令長官の部屋は「上(天井)はそのままです。壁は人のいるところ(奥の方か?)だけ木でした。片側だけですね。」という。この話からすると、作戦室の内装については直接いわれていませんが、天井と床はコンクリートむき出し



で、壁と扉は木製の内装がされていたのではないかと思われます。また地下壕の建設部隊について「年を取った召集兵が相当従事していた」と話されています。

ただこの座談会の時点で、敗戦後すでに46年ですから菅谷氏の記憶もかなり薄れていて当然です。ほかの日吉体験者や記録文書と一致しない話も多少あります。しかし、機関科の責任ある立場の人の貴重な証言の記録であることは間違ひありません。地下壕内の内装木材は、戦後、近隣の方たちが持ち出して薪代わりにしたという話もあります。今、残っているのは壁に埋め込まれた木レンガ(木片)と天井の電気配線

用の木板くらいです。こういったわずかな遺物と、体験者のお話をつなぎあわせながら、みなさんも想像力を働かせてみてください。いずれにしても物資のない当時にあって、相当な内装工事をしていたようです。

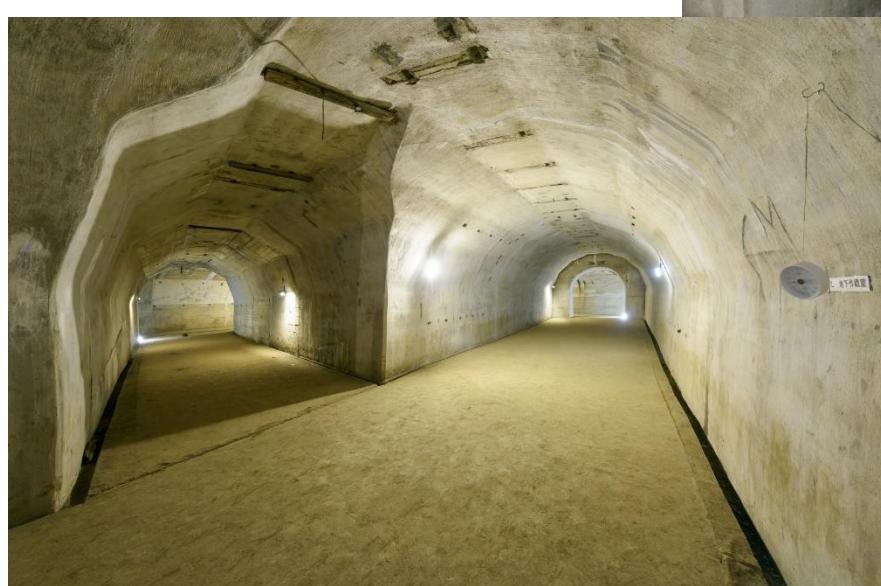
このように戦争の命令を出す司令部地下壕は「安全・安心」の世界でした。しかし地下壕の外は、くりかえし空襲にさらされる別世界。それどころかフィリピンや沖縄などの戦地は地獄でした。このコントラストの激しさを思わずにはいられません。



体育会本部（1941年）
(提供：慶應義塾福沢研究センター)



地下司令長官室



地下作戦室

連載

日吉第一校舎ノート(15)正面玄関の鷲(その1)

会長 阿久沢 武史

正面玄関から校舎の中に入ると、まずはホールがある。外に立つ4本の列柱に並行して、ここにも独立した4本の円柱が立ち、天井には円形の装飾があった。天井から吊り下げられた球体の照明器具が、南北に伸びる長い廊下に規則正しく並び、全体の印象はやはりきわめてモダンである。

内装への私の注文は厳しく、照明器具のデザインは特に製作に苦心したところで、未知の領域への挑戦には若い燃え上の執念、気力だけが頼りで、そのすべてに非常な困難がありました。(網戸武夫『建築・経験とモラル』住まいの図書出版局)

網戸の「苦心」とは裏腹に、残念ながらいまその照明器具は一つも残っていない。あるのは味気ない蛍光灯の照明と、無造作に廊下に取り付けられた太い給水管である。近代建築の価値に対する管理する側の無知が、もともとあったはずの端正な美しさを壊し、無機的な「單なる廊下」にしてしまった。

昭和8年(1933)10月の『三田評論』(第434号)「日吉建設工事の概要」には、「予科校舎建築工事概要」として、「正面中央広間」について次のように記されている。

床、テラツオ一、柱及び巾木は大理石(イタリー産トラヴアーテイン)貼り 腰壁は石粒入りセメントモルタルの上ペンキ塗り仕上げ 壁天井とも漆喰塗りとす

玄関の外に立つ4本の円柱はコンクリート打放しに白色セメントスプレーを吹き付け、ギリシア風の柱廊を形成する。中に立つ4本の円柱(扉側の壁にはめ込まれた柱を含めれば計八本)はイタリア産の大理石で覆われ、屋上まで貫くこの建物の芯となる。床はテラゾー(人造大理石)であり、そこにはペンの徽章を模した図柄と、翼を広げた鷲の図柄が規則正しく交互に並び、正面玄関から入る者を出迎える。

正面玄関の鷲——、我々は普段の学校生活の中で、この「鷲」の存在にいったいどれだけ気づいているだろうか。毎日その上をたくさんの生徒や教職員が行き交いながら、おそらくほとんどが気づいていない。「ペン」も「鷲」も、そのデザインは直線を主軸にした典型的なアール・デコである。無駄な装飾をいっさい排したシンプルな図柄であるゆえに、存在を強く主張しない。それが「気づかない」主な理由だろうが、日常の慌ただしい生活の中で、そもそも我々は自分の足元が十分に見えていないのである。

西洋では一般に、鷲は食物連鎖の頂点に立つ「力」の象徴として、権力や武力と結び付けられることが多い。だとすれば、それは横にあるペンの徽章と大きく矛盾する。2本の直線が交差した図柄が確かにペンであるとすれば、それは慶應義塾の根幹の精神である「ペンは剣よりも強し」の意味する内容と重なるはずである。だから我々は、ペンとセットで配されている鷲に、奇異な感じを受けざるをえない。

「鷲」とは何か。1930年代に、「鷲」はヨーロッパを席巻したナチス・ドイツの鷲である。そして第一校舎の玄関ホールで翼を広げる鷲は、なぜかそれによく似ている。

※本稿は『慶應義塾高等学校紀要』第46号(2015年)に発表した拙稿「日吉第一校舎ノート(二)クラシックとモダン」の再録となります。



玄関ホール、「鷲」と「ペン」

連載

海外の戦跡めぐり(10)ソウル・韓国

—朝鮮総督府と今もひっそりと残る円丘壇— 運営委員 佐藤宗達



この写真は北岳山から一望するソウル市内
(南山の中心にそびえる塔はソウルタワー)

王が臣下の朝見と賀礼を受ける正殿として用いられていた勤政殿の前を塞ぐような形で工事は始まりました(着工1916年、竣工1925年)。王宮の城門である光化門は撤去の危機にさらされましたが、雑誌「改造」に掲載された柳宗悦の批判文などの反対運動が功を奏し、取り壊しは免れたものの移築させられました。

また、朝鮮総督府は朝鮮半島初の西洋式ホテル(朝鮮ホテル:朝鮮総督府ステーションホテル)の建設を計画し、ソウル駅(当時は京城駅)から近い市内の中心部の丘の上にある円丘壇に建てる事にしました。円丘壇は天を祭るもので大韓帝国の皇帝が祭礼を行う場所でしたが、建設にあたり円丘壇の一部は壊され、ホテルの敷地の片隅に追いやられる事となりました。1913年に開業、日本人だけでなく外国からの要人が泊まる迎賓館の役割を果たしてきましたが、1945年8月の終戦の後は米軍が接收、朝鮮戦争時には一時司令部がおかされました。現在は「ウェスティン朝鮮ホテル」と改称、格式高いホテルとして継続されていますが、円丘壇は言わば裏庭にヒッソリと建っています。

朝鮮総督府は、韓国独立(1948年)後、国立中央博物館として活用されてきましたが、1990年から景福宮復元事業が始まり、「文化財として残す意見よりも負の遺産を撤去の意見」の方が多い、1996年に解体撤去され、それに伴い光化門は元の位置に戻されています。因みに同じ年代に建てられた台湾総督府は現在も使われております。

ソウルは風水都市のことです。案山(風水用語:前方のエネルギーから住居を守る構造物)である南山、内白虎である仁旺山、内青龍である駒駝山、朝山である北岳山に囲まれた地脈の上に都市が築かれ、中心地に朝鮮王朝の王宮である景福宮が建てられています。

1910年、日韓併合により朝鮮統治の為の「朝鮮総督府」が設置され、当面南山にあった韓國統監府が使用されましたが、その後職員の増加により新たな庁舎が必要となり、景福宮の敷地内に建てられることになりました。朝鮮総督府建設のため景福宮は整理・解体され、国



ウェスティン朝鮮ホテルに隣接する円丘壇

お知らせ

「戦争体験者のお話」 公開講座

ガイド養成講座の第3回は「戦争体験者のお話」です。貴重な機会ですので、この回に限り受講者以外の方にも一般公開いたします。元海軍軍人だったお二人に、インタビュー形式でお話をうかがいます。どなたでも、ご参加いただけます。

日時：4月6日(土) 13時～15時半

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎2階 中会議室

話者：岩井忠正さん(98才) 人間魚雷「回天」、潜水服の特攻「伏龍」の元特攻隊員。

慶應義塾大学出身の学徒兵。弟の岩井忠熊さんは特攻艇「震洋」の元隊員。

京都大・学徒兵。

近藤恭造さん(90才)元海軍電信兵。少年志願兵で敵国通信傍受。空母瑞鶴乗組み沈没。

その後、埼玉県大和田通信所で勤務。

※なお、ご本人の体調によっては、ビデオ映写の場合もあります。

問合せ：亀岡敦子 Tel/Fax 045-561-2758 参加費：無料 予約不要 (定員50人)

戦跡をめぐるバスツアーのご案内

「三多摩戦争遺跡と横田基地ウォッチング」

日時：2019年4月21日(日) 8時～18時(予定)

コース：日吉 →府中市・白糸台掩体壕(調布飛行場西側)

→三鷹市・大沢1号、2号掩体壕(調布飛行場北側)

→立川市・中山坂防空壕跡の戦災供養地蔵堂・歌碑

→米空軍横田基地(レストラン屋上からウォッチング)

→東大和市・弾痕が生々しい日立航空機変電所、慰靈碑

→稻城市・多摩火工廠跡(現・米軍レク・センター外観のみ)

→日吉(解散)

集合：7時45分 慶應義塾大学日吉キャンパス警備室前 出発8時

参加費：5,000円(交通費・資料代・保険料など) ※当日集金します。

服装・持ち物：歩きやすい靴と服。天候により雨具。雨天決行、行先は市街地です。

定員：25名(先着順)

問い合わせ・申込み先：亀岡敦子

(TEL/FAX 045-561-2758)



府中市・白糸台掩体壕
(掩体の中に特別に入れます)

活動の記録 2018年10月～2019年1月

- 10/9(火) 地下壕見学会 日吉台小学校 6年生 118名
- 10/10(水) 定例見学会 58名 川崎・横浜平和のための戦争展実行委員会
(法政第二高校教育研究所)
- 10/18(木) 会報136号発送(来往舎205号室)
- 10/27(土) 定例見学会 58名
- 10/30(水) 慶應義塾高校地下壕見学会
- 11/2(金)・3(土)・4(日) 第26回川崎・横浜平和のための戦争展2018(川崎市平和館)
2日準備・設営 3・4日 展示 4日 若者の発表・講演 吉田裕氏
- 11/7(水) 運営委員会(来往舎205号室)
- 11/10(土) 白井厚研究会OBG会で報告「日吉台地下壕と保存の会の活動—慶應義塾日吉キャンパスに残る戦争遺跡—」(慶應義塾大学三田キャンパス北館大会議室) 小山信雄
- 11/14(水) 定例見学会 47名
- 11/19(月) 地下壕見学会 17名 東急コミュニティ(株)研修会
- 11/23(金) ガイド学習会(菊名フラット)
- 11/24(土) 定例見学会 53名
- 11/27(火) 地下壕見学会 日吉南小学校 6年生 153名
- 11/29(木) 非核兵器平和都市横浜への要望書提出(横浜市長宛) *戦争遺跡の保存等も
(横浜市非核兵器平和都市宣言市民のつどい実行委員会)
- 12/1(土)・2(日) 「学徒出陣75年シンポジウム/研究報告『慶應義塾と戦争』」
研究報告 「上原良司の新資料による虚像と実像」 亀岡敦子
「〈教材〉としての日吉台地下壕」 阿久沢武史 (慶應義塾大学三田キャンパス南校舎ホール)
- 12/3(月) 地下壕見学会 矢上小学校 6年生 103名
- 12/8(土) 聞き取り調査(元通信兵高田賢司さん)
- 12/12(水) 定例見学会 59名
- 12/15(土) 定例見学会 40名
- 12/19(水) 地下壕見学会 下田小学校 6年生 116名

2019年

- 1/9(水) 定例見学会 45名
- 1/12(土) 第13期戦争遺跡ガイド養成講座第1回 受講者10名(来往舎中会議室)

★地下壕の定例見学会は予約申込が必要です。

- ・原則として毎月2回実施(第2水曜日10時～12時30分・第4土曜日13時～15時30分)
- ・2月は第1水曜日6日になります。

★お問い合わせ・申込は見学会窓口まで Tel/Fax 045-562-0443 喜田(午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 阿久沢 武史 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会